

平成 26 年 9 月 1 日

## 京口門だより No. 11

雨の多い夏が終わりかけたら急に秋がおとずれ、とまどう気候のこの頃です。季節の変わりめは体調を崩しやすく注意が必要です。きゅうに涼しくなって夏の装いのままで風邪をひきこんだり、アレルギーの人は咳がでやすくなり、気管支喘息をおこしてくる場合もあります。

子供の喘息はアレルギー体質の子がおこしやすくなります。大人のばあいはもともとアレルギー体質をもったひとが、風邪などをひいて咳がとまらなくなっておきてくる場合がよくあります。気管支喘息は気管のアレルギー性炎症がもととなって、気管支が狭くなり、呼吸がしづらくなって、気道も狭くなり、外からでもヒューヒュー、ゼイゼイと音が聞こえてきます。現代医学では喘息の標準的治療はステロイド剤の吸入療法といわれています。それで良くなってしまいう人もいますが、慢性化して気道の過敏性が生じて、難治性になってゆく場合もあります。特に小児の喘息に吸入ステロイドを用いるのは意味がないという現代医学の論文もでています。

漢方医学では昔から、シワブキといたり、哮喘(こうぜん)といたりしていろいろな治療薬があります。喘息でも呼吸困難になって、顔をあかくして大汗をかいて苦しがるタイプの方は、比較的体力のある人です。一方、呼吸困難になっても、青白い顔をして寒がって苦しむ弱いタイプの人もあります。どちらのタイプかでもちいる漢方薬もことになってきます。どちらともいいがたいタイプにも通用する漢方薬もあります。とくに夜眠ると苦しくなって目覚める場合、寝る前に薬をのんでいただく場合もあります。喘息は呼吸困難の発作がつづき、重積状態になり窒息にいたることがあるので、早くから吸入ステロイドを使いはじめますが、一般的にあって、漢方の立場からは、呼吸困難の発作が重症化する前に、早くから漢方治療をおこなえば、窒息にいたるような重症化を防ぐことができると考えます。子供の場合はとくに早期から漢方治療をおこなえば、多少時間はかかっても良くなってゆきます。大人の場合は、たとえばいつまでも咳が治らないとっている段階で、治療にはいれば、喘息が重症化することを防ぐことができます。そのためには喘息のことをよく知らねばなりません。とくに花粉症やアレルギー性鼻炎のある方は、注意される必要があります。

